

## 第2回長野県山岳遭難防止対策検討会 委員発言要旨

日時：平成25年10月29日（火）13：30～  
場所：議会棟3階 第2特別会議室

### （事務局）

進行：スポーツ課 内山企画幹  
開会あいさつ、資料説明：浅井観光企画課長

### （節田座長）

第1回の会議の議論内容について、最終的なまとめを念頭において浅井観光企画課長より説明を頂いた。これを煮詰めて、最終的な提言にまとめていきたい。続いて、いわゆる山岳遭難とは関係ないが、篠崎委員からバックカントリーにおける遭難について資料を提供して頂いている。説明をお願いしたい。

### （篠崎委員）

お手元にバックカントリー遭難発生状況の過去10年の割合とタイトルをつけさせて頂いているものがある。前回検討会の中で、山岳遭難に占めるバックカントリー、特に北アルプスの北部地区で深刻であるという状況。遭難という括りの中で、状況について説明したい。手元に配布した資料は今年の9月に大町警察署がまとめた大町・白馬・小谷エリアのバックカントリー事故の過去10年間の発生状況を示した資料である。1の発生状況を見ると、平成16年から件数は過去9年間で件数59件、85名。大町警察署管内の23年度の遭難件数を見ると、39件中10件で4分の1がバックカントリーという状況。続いて、次のページで北部地区の山域別に見ると、小谷の白馬乗鞍の件数が多い。白馬乗鞍のスキー場では、バックカントリーに非常に力を入れており、人の入込みも多く、事故の比率も高まっていると推察する。

また、次のページで月別で見ると、比較的この地域で春山と呼ばれている、雪が安定する3月～4月・5月のゴールデンウィーク明けにかけての期間に多発している。年齢別にはやはりバックカントリーを楽しむ方はむしろ登山者よりも逆で、若い方々が特に多い。

次のページに居住区別という資料をつけているが、その他の区分には外国人が含まれている。まだまだ外国人の遭難の割合は低いですが、数として外国人は増えてきている。大町警察署含め北アルプス北部地区の遭対協ではバックカントリーの事故防止をはかるために、国内・国外用に啓発のチラシを作った。内容は別添のとおりである。今日来ている県警の山崎地域課長は前任まで大町警察署にあり、最前線で尽力していたため、何かあればぜひ伺いたい。

### （節田座長）

山崎地域課長は、何かあれば。

### （山崎地域課長）

特にない。今の説明のとおりである。

### （節田座長）

では、山岳遭難のデータと併せて参考にして頂ければと思う。

それでは、最初のテーマである、現状と課題について説明を頂いたが、まず前回の話の中で、現状認識について何か追加するような話があれば発言を頂きたい。あるいはこのまとめの中で、修正・あるいは追記した方がいいということがあればお願いしたい。

### （東委員）

参考までに。参考資料としてつけたが、統計をもう少し詳しく分析すると、槍穂高方面の方は年々負傷者の数

が上がって、件数がどんどん増えている。白馬方面は気象遭難に起因する大量遭難で遭難される方が多い。山域別の特徴が出ていますので、そここのところだけ付け加えて、山岳遭難の実態を明確化していただければと思う。

それから、バックカントリーの事故の方も、乗鞍の話が出ていたが、恐らく乗鞍のスキー場から直接上がっていく遭難者の数に加えて、梅池からゴンドラとロープウェイを繋いで入るころになってからの事故が非常に多いのではないかと。それ以外は、多分白馬や針の木大雪渓等の雪崩に対する警戒が少なく、大量遭難という形になっているようである。少し内容を詳しく分析しておけば、その地域その地域での対応策としてももう少し細かく提言できるのではないかとこの風に思う。

**(節田座長)**

恐らく白馬の方は春山の遭難だろう。秋の遭難事例もあった。

**(東委員)**

春の季節はずれの雪、それから秋の急激な高低差など、そういった形で。白馬の方はのこぎり型の事故だが、それに対し槍穂方面は右肩上がりに遭難件数が増えている。

**(節田座長)**

他に何か補足はあるか。現状認識というところでまとめて頂いていると思うが、なければ第2の課題の方に移りたいと思う。前回ご確認頂いているが、追加あるいは訂正したいところがあればご発言頂きたい。なお、県外居住者が多いとなっているが、長野県も遭難者数が2位の39名ということは、県内に対しても啓蒙していく必要があるとも言えると思う。今少し話が出たが、春山の遭難事故が多発しているということ。季節の問題については1回目にあまり話がでなかったが、北部の松本さんは、そういった面から何かあれば。

**(松本委員)**

ゴールデンウィークに入山者が多く、たまたまゴールデンウィークの時に雪が降り、私は猿倉相談所で当番で(現場に)いたが、その時に天候が急変し、みぞれから雪に変わり、九州のお医者さんの一行が確か6名、低体温症という形で亡くなった。地元の方は、ふもとでちらちらと雪が降ると、稜線あたりは20~30センチは降るだろうという予測をするが、雪のない他県の人たちは春山に対する初歩的な了知というか、判断が欠けているのではないかとこの気はする。雪崩も大雪渓であったのだが、普段は積雪が30~40センチ積もると、大雪渓の場合は各2号とか3号、あるいは稜線から落ちてくる、雪崩が大雪渓に集中するわけで、無理をして行って、雪崩に遭ってしまった事故がある。そんなことで、気象的な判断は大切ではなかろうかというのは、先ほどおっしゃる通りである。現場で自分が実際に救助にあたってそのように感じた。

**(節田座長)**

自分が学生の時は、春に白馬あたりは登山者がいなかったのだが、やはり増えているのか。

**(松本委員)**

増えている。

**(節田座長)**

しかも九州とか西日本の方が多。

**(松本委員)**

先程秋の話があったが、祖母谷の方から登ってきて起きた事故があり、その方も確か九州の方。ガイドがっていたが、秋雨前線から雪に変わった、というものがあ。

**(節田座長)**

穂高の方はどうか。やはり低体温症があ。

**(山口委員)**

低体温症は穂高の方でもある。一度雪が降ると冬山と同じ状況になるので、特に白馬もそうだが、稜線の風当

たりの強いところを歩いている登山者は一発で亡くなるというケースがある。本当に気象には十分注意が必要。春山にしても3月、4月、5月頃までは冬山と同じだという意識をもっと持たなくてはならないと思う。

**(節田座長)**

事務局の方には、是非6のところは春山及び初冬というか、晩秋の山も加えておいて頂きたい。特に秋は人間の体はまだまだ夏の名残がある。体もまだ寒さに慣れておらず、秋の雨が一番冷たいというのは我々も非常にづらい経験をしている。夏山はもちろんだが、春あるいは初冬の山も強調して頂きたい。他に何かあるか。

**(東委員)**

今の気象の件だが、小蓮華岳の遭難事故の調査委員に聞いたのだが、この事故の場合過冷却水による体温低下というのが一番大きな原因だったようである。以前に比べて遭難原因として低体温症とよく言うが、かつてないほど登山者は急激なる気象変化、低体温になりやすい状況の中にいるという認識をした方がいいのではないか。小蓮華岳で遭難されて亡くなられた方は、体に30センチほどの氷の層ができてしまった。なぜそうなるのかというと、過冷却水による急激な気象の変化が原因ということである。その前にGW中に大雪渓で雪崩事故があった年があるが、自分も山が好きなので、同じ日に白馬岳の北にある雪倉岳に登っていたが、急激に寒気が入り込み、猛吹雪になった。あの時は確か鹿島槍では落雷で亡くなられた方もいた。その時に気象予報士に急速な天候変化はなぜ起こったのかと聞いたのだが、気象予報士も事前に急速に変化すると読めなかったということであった。

そういう地球温暖化に伴うものなのかどうかはわからないが、自分たち登山者は以前よりさらに厳しい気象の変化の中で登山をしているという認識をもって、早め早めに逃げる必要があると考えているが、そういったことも注意喚起していくべきだと考える。

**(節田座長)**

トムラウシ山大量遭難以降、低体温症という言葉が非常に目立つようになった。かつては疲労凍死という言葉で全てをくくっていたが、注目されたことは、非常にこれからにとって大きな警鐘になると思う。羽根田委員は実際に気象遭難の取材等をされて、何か追加はあるか。

**(羽根田委員)**

後蓮華のケースにしろ、黒部側からのガイド登山にしろ、それからトムラウシもそうだが、共通しているのはエスケープルートがない長いルートに、ある程度まとまった人数で登っているときに、悪天候に見舞われて遭難しているということ。登山の場合人数が多ければ多いほどスピードが鈍るし、その分リスクは高くなってくるので、これは自分の感覚的なものだが、5人以上のパーティだと、そういうことも加味してエスケープルートが無い・少ない、長いルートをたどるときは、どこで撤退か進むかということの判断をすることが重要になってくるのではないかと感じている。

**(節田座長)**

それでは、現状認識という点では、そんなところでよいか。第2の具体的な防止対策に関わる課題として、4つほど事務局の方から論点整理して頂いたが、この2について追加等あれば。(4)については山口委員と松本委員、諏訪の高橋委員はその辺りについて特に何かあれば。

**(山口委員)**

この遭対協の組織の問題のことであるが、もともとはこの話が出たときに県の方に聞いたところ、遭対協の組織を見直す時期になっているのではないかという話があった。県の担当は今、防止対策部はスポーツ課、救助部は県警、総務部は観光課という形で遭対協の組織がなされているが、もっとスムーズに我々の意見など全県的に反映できるような組織というか、流れの方がいいかなという感じがする。特に人の命に係わる問題を扱っている山の会議なので、できれば1年~2年で変わるような組織よりもある程度落ち着いたところで遭難問題を考えてもらえればいいのでは。観光課の方で力を入れてやっており、(信州登山)案内人制度を作ってきた経過もある。

やはり遭対協の組織も一本化というか、そういう形にして観光部の方で何とかこれを強化して頂ければと思う。

#### (松本委員)

山口さんが言われた通りだが、遭難事故が起こったときにいかにスムーズにバックアップ体制をとって救助にあたるかということが我々の最大の使命。地区の遭対協があるが、それぞれ訓練や研修会を実施したり、あるいは県警のレスキュー隊と合同のヘリの訓練をしたりしながら、若手の救助隊員を育成しながら、事故が起きた時にできるだけ迅速に救助にあたるということが一番思っていることである。

それに付随して、登山道の整備等々、山小屋の皆さんや地元の遭対協、あるいはボランティアで登山道整備も行っている。またシーズン前常駐隊が上がる時にそれぞれ白馬の場合はルートを偵察し、浮石の除去や鎖場のチェック、登山道の看板の整備などもシーズンはじめにチェックしているが、看板（整備）などは予算に関わる。登山道がよくなれば、事故も少なくなると思う。南部と北部の遭対協はそういった形。

#### (節田座長)

高橋委員は、八ヶ岳がフィールドになるかと思うが、何かあるか。

#### (高橋委員)

(3)の方になるが、八ヶ岳の場合非常にアプローチが近いというか、登山のエリアと観光というか、そういったエリアが近いということもあって、観光客が少し足を伸ばして、それが事故につながるというようなことも起きている。前回も話があったが、アドバイザーというか、北アルプスなら横尾で、指導をしてくれる人がいれば、例えば水際で止められる。ただ、それをあちこちに配置するわけにいかないんで、代わる物とすれば、しっかりした案内標識がきちんと整備し、登山のエリアと、いわゆる観光客が車から降りて散策できるエリアを明瞭に分けて、知らせられるようなことがあれば、そういった事故は減るかなと思う。

それから(4)遭対協の関係だが、救助活動は救助活動であるが、補導員という形で委嘱された方が数多くいるが、今は補導員が一定の時期、例えば補導所の開設時期しか活動しないということで、通年各個人の方が山に入る、プライベートで入る場合でも、補導員として何らかの形で声をかけられるようなことができないかなということを考えている。それと、登山道の方に戻るが、前回登山道の調査をされていると伺ったのだが、その後何かまとまったものはあるのか。

#### (自然保護課長)

登山道の調査のお話しであるが、県では今年度1年かけて県下の登山道整備を行っている。整備の実態状況・荒廃状況・利用状況これらを登山道それから山岳環境ということで調べている。この結果が出るのが3月末になるので、その結果を踏まえながら、各山域の皆様にもお集まり頂きながら、市町村・行政関係者で連絡会を立ち上げ、方針等を検討してまいりたいと考え、進めているところである。

#### (節田座長)

話を進めやすい(3)(4)から始めたが、(3)(4)に関して追加で意見等あれば。なければポイントである(1)(2)特に啓発、登山者の意識啓発は、長野県という組織だけでできる問題ではないように思う。民間の協力、マスコミの協力も含めて取り組むべき大変大きな問題だと思う。(2)はとらえにくい問題だが、いわゆる未組織の登山者がほとんどである状況なので、手をつけるのは非常に難しいところ。一つ啓発行動・広報活動をやっていかなければいけないところだと思っている。このあたり羽根田委員はどうか。特効薬というのはなかなかないとは思いますが。

#### (羽根田委員)

この件については昔から皆さん喧々諤々論議されていると思うが、以前県警の救助隊員の方と話をしたのは、ある程度ショック療法的な物が必要ではないかということ。例えばマスコミで流れているのは、ヘリコプターが

上を飛んで、下に人がいるような映像だが、それよりももう少しインパクトの強い、遭難するようになってしまふのだというぐらいの物も提供していいのではないかという意見も出た。

また交通安全で取られているスケアードストレートという手法（恐怖を直視させるような教育）がある。これはスタントを使って交通事故を再現させる、例えば実際にスタントの人が自転車に乗っているところに車が突っ込んできてぶつかって、ケガをしそうになるというようなもので、ユーチューブなどに出ている。その手法は登山にも使えないか。もちろん事故をスタントで再現させるのは無理だと思うが、フリークライミングでトップロープで落ちるといような体験をするのと同じなのではないかと思ふ。そうしたものを生かすとか、先ほどの映像の話も含め、恐怖を実際に直視させるというような啓蒙方法も考えていいのではないかと思う。

**（節田座長）**

雪崩の埋没事件というか、そういうものは体験できる。

**（羽根田委員）**

今の事でいえば、ゴープロが流行っているが、ヘルメットなどに小型のカメラをつけてスキーをしたり。これは海外の映像だったが、それをつけてスキーをしていた方が実際に雪崩で埋まってしまって、その間カメラは動いていたけれども、しばらく真っ暗な映像が15分ぐらい続いていて、その後上に明りが射ってきて、掘り起こされて助けられたというような映像も出回っている。そういうのも1つの方法かなと考えている。

**（節田座長）**

他に追加で（1）（2）に関して何かあるか。次のテーマ、資料の2で前回の意見集約をもう一度再検討する時間も必要なので、なければ次の資料2の説明をお願いしたい。

**（浅井観光企画課長）**

それでは資料2をご覧いただきたい。今後の山岳遭難防止対策についてであるが、今後の対策について前回の会議で委員の皆様から頂いた意見・提案をまとめた資料である。限られた分量の中であるので、若干発言の趣旨と違うなどあればご指摘を頂きたいと思う。資料に1～6とあるが、1の情報提供と意識啓発、2山域での直接指導などについては記載のとおり、前回も今後の方向性・具体的な事例等も頂いている。更に追加のご提案等あれば、頂きたい。

3環境整備4実施体制5規制については、前回あまり触れる時間がなかった。今前段での議論の中でもこの辺検討を頂いているが、この辺りについても、ぜひ皆さまのご意見を頂戴したい。

**（節田座長）**

資料2を見ながら、話が重なると思うが、ご自分の発言はお分かりと思うので、万が一何か訂正があればご指摘頂きたいと思う。この後の進め方としてはある程度このようにペーパーに論点がまとまっているので、まず第1に情報提供と意識啓発でどんな施策が必要か。次に第2として、実際に山域での直接指導に関して、どんなことできるのか。この辺が一番具体的な話が沢山出てくるのではないかと思う。

さらに3～4で環境整備・実施体制について、ある程度話は出ていると思う。5の規制については最後にまとめて話したいと考えている。この表でいうと1、2のあたりで何かご意見・訂正等あればご発言頂きたい。検討会は今年度内に3回開催を予定しており、次回3回目は2月の予定であるが、最終的なまとめの会としたいので、委員の皆さんが日頃考えていること、ぜひ盛り込んでほしいこと、具体的な取り組み等についてご意見があれば今回発言を頂きたい。

**（宮本委員）**

具体的な話をしていくといくら時間があっても足りないと思うので、基本的なところというか、当たり前かもしれないが、前回座長の勧めで登山道の状況や、どんな事故が起きているかという辺りで一番いいところについて頂いた。今日は具体的な話なのだろうが、本当に遭難が尽きるには、小さい頃の教育ということが皆さんの頭

の中にあると思う。そういうことがあるのだが、今ここで求められているのはそういうことではないという観点で、自分は臨んでいるつもりである。しかしそこを落としてしまうと、1行でも入っていないと、本当の対策にはならないような気がする。

また、事故に対する見方だが、自己責任ということを強調してみるのか、あるいは事故が起きるから、それを支援したり援助したり、場合によっては管理をするという観点で見るとかという点でも、大変1つずつの対策や念頭を見る時に違いが出てくるのではないかと。私共は山岳会を作っているのでも、いつでも登山というのは自己責任ということと言わざるを得ない。しかし、それだけでは長野県というのは済まない面がある。それを具体的な対策も、ある程度分けて、そういうことに則らないと、ぼけてしまうのではないかと。

#### (節田座長)

山登りは当然、基本は自己責任であるということを経験しなければ、いくら言ってもあまり意味がない話だと思う。確かに指導というか、山登りの基本的なルールを何らかの機会をもって学ぶ場面は必要なのではないか。それが登山者教育ということに当たるかと思う。それだけでは十分カバーできないところがあるので、サポート体制については行政としてどのような手法が取れるか、という話になる。教育という面では(1)の情報提供の充実、(2)の意識啓発がいわゆる登山者教育というか、登山者の基本的なスキルアップのための情報提供にあたると思う。一番大事な部分だと思うが、問題の大小もあり、非常に捉えにくいところではあると思うので、ぜひ皆さんから意見を頂きたい。

東委員の場合は指導者教育だが、そこから一般の登山者の形というのも見えてくると思うが、どうか。

#### (東委員)

指導者の教育ということで登山研修所があるが、今の事故の態様を見ると、指導者が一般の方に指導しやすい体制も作っていかねばならないと思う。それぞれの山岳会であったり、総合型スポーツクラブでも登山教室が出来ているので、これは日本山岳協会さんがやっている登山スポーツ指導員の拡充という形でどんどんと安全登山を指導する指導者を増やしていく。また、信州登山案内人の活用というところにつながってくるかと思う。

一般の登山者の方は色々な情報を自分で分析して、必要な情報を取り出すという能力が足りない。初めて登る山ガールのような人はどこに聞いたらいいかわからない。仕方がないのでとりあえず自分たちで行ってしまったということが多いようである。そういう指導をしてもらうためにはどこに行けばいいのか、自分たちの力量ではこの登山は難しいということがあれば、例えば長野県のホームページを見れば山案内人の方の連絡先があって、そこに問い合わせをして、自分たちの力量を補ってもらえる方法を見つけられるなどいいのではないかと。

そして指導者の層を厚くする。指導者を活用するところは、行政もサポートしやすいだろうし、効果のあるところだと思う。あとは山岳総合センターがあるので、そちらに情報を集約して、登山者はとにかく長野県の山登りの情報は山岳総合センターのホームページを見ればという形にしてはどうか。現在山岳総合センターの運営委員を仰せつかっているのでも、山岳総合センターの方が大変努力をされているのは理解しているが、そのことに対して行政からのサポートをして、長野県ならではの指導者の拡充と、長野県ならではの情報発信の方法というところを厚くしていくというのはいかがでしょうか。ホームページの内容は恐らく情報提供と意識啓発と山域での直接指導にかかる山案内人の活用であるとか、山岳会の問い合わせ先があるという形になるのが理想ではないかと思う。

#### (節田座長)

今日は山岳総合センターの方はいらっしゃるのか。

#### (茅野スポーツ課長) ※代理回答

長野県の山岳総合センターは、以前は教育機関ということで、指導者の養成はもちろん一般の登山者の方も研修等を行っていた。3年前に指定管理とし、講座数を増やして、かなり県外の方の利用も増えている。情報発信

も山岳総合センターの方で工夫をしてもらいながら進んでいるので、以前に比べてかなり充実してきていると思う。

**(節田座長)**

鈴木委員は実際にステップアップ講座等をやっている、ツアー会社がこういうことで果たせる役割というか、そういうことでサポートできることは何かあるか。

**(鈴木委員)**

先ほどのショック療法のような映像のようなものを県の方で作ってもらえれば、当社でもお客さんを集めて山の説明をするときに、当然山のいいところと同時にリスクがありますよということは、そういったものを使って説明できると思う。ただ、非常に限られたお客さんの層なので、一番のポイントである未組織登山者でツアー会社も使わないという方にどう浸透させるかというところが一番やらなければいけない、肝になる部分だと思う。キャラバンも非常に限定的だと思うし、どういう風にやったらいいのかというところは皆さんと知恵を出し合わなくてはいけないところだと思う。

**(節田座長)**

今おっしゃるように、民間（山岳団体・ツアー会社・登山用具店等）でいろいろな登山講座というのは沢山実施している。そういうところに山岳遭難アドバイザーを中心に、長野県の方からも働きかけるべき。羽根田委員の発言にもあったように、リスクがあるということはショックを与えなければなかなか印象に残っていかないと思う。そのような登山講座のキャラバンを積極的に展開してほしいと思う。もちろん長野県以外、特に大都市の地元新聞等と組んで、夏山前に講座を開くなど、いろいろな方法があると思う。そういったことを積み重ねていくのが、最終的には一番近道では。その他何かあれば。

**(山口委員)**

情報提供の充実と意識の啓発というのは、本当はかなり広範囲というか、登山者の9割方が未組織の、個人で来ている方が事故を起こすというパターン。そういうところへどうやって効果的な情報を発信するかというのはかなり難しい問題があるが、各山小屋では自分の山小屋のホームページを持っているので、今登山道はこうだよとか、明日からは天気が悪いから止めた方がいいですよとか、そういうものを毎日のように発信している状態なので、それを見て登山計画を立てる人がかなり増えているのかなという感じがする。自分はインターネットはまったくできないが、そういうものを効果的に使うのも非常に効果的な手段だという気がしている。

この下に一番言う事を聞くのは、登山口でのアドバイス、これが一番効果がある。何が効果があるかという、直接山の専門家によるアドバイス、水際と書いてあるが、山際。水際となれば、間近の場面。自分たちの山域では、横尾から上が山の世界という感じになってくるので、横尾まではハイキング、そこから上については神の領域に自分たちは入っていくのだということを、もっと植え付けていきたい。私は横尾から上、涸沢方面には横尾の橋があるので、いっそもしめ縄でも付けて、自分はこれから先へ入るのは神様の世界に自ら入っていくのだということを植え付ければ、それだけで2割～3割遭難者も減ってくるかなと。やはり意識付けというのは非常に大事だと思うので、服装とかそういうものはまたその後でアドバイスすればいいかなと思っている。

**(松本委員)**

安全登山のハンドブックが、2012年のものがあったので。これは公益社団法人の日本山岳ガイド協会が作成して、スポンサーにアミノバイタルがついている。ご存じだとは思いますが、こういった形で、長野県の山関係に関してハンドブックのようなものを作ればいいのではないかと気がついたのでちょっと（冊子を）回して頂いて。

**(節田座長)**

今の発言に、座長が意見を言っているのかわからないが、ぜひプラスして頂きたいのが、山口委員のお話は2番の(1)につながると思うが、ぜひその山域におけるリスクマップ、要するに遭難の危険性のある危険地域の表示、あるいはここに先程羽根田委員がおっしゃったショック療法を加えるなら事故例等加えるとよりインパクトがあるかと思うが、そういったものを整理して頂いて、特に山のコース別にグレーディングをすると非常に分かりやすいのではないかと思います。とりあえず長野県の北アルプス地域から初めて頂いて、そういう、あなたはこういう登山コース、こういうところに行くんですよということを明確に意識付けさせるというのはまさに山際対策の一番のキモかなと思っている。他に何かあれば。

#### (鈴木委員)

山口社長と座長の意見に近いのだが、先ほど横尾から先が、そこまでと厳しさの異なる山の領域であるというのが、一般の初心者の方にとっては、上高地から明神・徳澤と来るが、そこが境目だというのがなかなか分からないと思う。後で話が出ると思うが、登山届、登山計画書も、上高地とか明神だけを歩く人は多分必要ない。その辺もやはり横尾から先に行く人は必ず出せというのを、誰もが分かるように。ある程度自分で判断すべきものではあるが、そういったものをしっかりとガイドラインを決めて行った方が分かりやすいのではないかと。

他県の例ではあるが、尾瀬ヶ原の木道だけハイキングの人は多分登山届を出さなくてもいいと思うが、そこからやぎヶ岳や至仏山へ行く人は当然出す。その境目がわからないということであればある程度山の専門の方が話し合いをして、ここから先は必ず登山計画書を出す、ここまでは遊歩道の延長ということをはっきり決めるということも一つ、いいのではないかと思います。

#### (節田座長)

確かに先ほど高橋委員が発言されたように、八ヶ岳などはそういった境目が非常にあいまいである。ヨーロッパなどでは、ハイキングの世界とアルピニズムの世界は地形的にはっきり分かれるので今さらその必要はないが、カナダあたりだと、ここは馬でも入れる、ここはマウンテンバイクでもいい、最後は歩きしかない、その先はクライミングの世界という区分を、全てアイコンというか、イラストで付けてある。そういうのも一つの方法論かと思う。羽根田委員は何か、その辺であるか。

#### (羽根田委員)

これは前取材をした心理学の先生がおっしゃったことだが、遭難を減らすには、リスクを可視化すればいいのではないかと。遭難多発地帯に、その場所で無くなっている人の数だけ十字架を立てておけば、みんな気を付けるだろうとおっしゃっていた。さすがにそれは無理だと思うので、先ほど山口委員がおっしゃったことに付け加えるなら、混雑する時期は無理だと思うが、山小屋で食事が終わった後、例えば20分とか30分とか、遭対協とかガイドの方が周辺の危険地域について解説する、一か月前にここで事故があったとか、そういうことを登山者に教えるという時間を設けてもいいのではないかと。未組織登山者が集まる場所はどこかと言えば、登山用具店と、メーカーのイベントなど、そういったところでやはり、ガイドの方とか遭対協の方が啓蒙できる機会をタイアップして設けていったらどうかという気がしている。

#### (節田座長)

他に何かあれば。問題が大小いろいろあるので、まとめにくいところではあるのだがぜひいろんなアイデアをこの際全て出してもらえれば。

#### (加藤委員)

先ほどから出ている横尾の問題については、まさにそういう位置づけを、機能として抜本的に行政がしていかないと進まない。民間の施設しかない場所なので、明確に水際の啓発指導を可視化し、遭難の事例も掲示するなり、マップなり、グレーディングも含めて、伝えていくという機能を今きちんと決めないと、多分このままの議論で終わってしまうのではないかと思います。きちんと公的な機能としての位置づけをするべきかと思っている。も



う1点、水際の他に必要なこととしてだが、私ども山岳観光課では全国から登山のガイドや問い合わせが急激に増えている。そんな中で感じることは、やはり現地の中で、ニーズに応じてガイドといっしょに登ることが出来る、そういった機能というのは、誰かがやるというのは別にして、高めていく必要があるだろうと思う。お金がかかっても、ガイドと一緒に登れる仕組みがしっかりできていれば、東京発ではなく、現地でも気軽に頼んで同行できるということが必要ではないか。それは目的地に行くというだけではなく、一緒に山を歩きながら、基本的な山の歩き方や遭難防止についても学べる、2つの意味を持った、到達するだけではなくて、一緒に1～2日行くことによって山の基本的なことが覚えられる、その2つを加味したガイドの仕組みというのが必要ではないか。こういうニーズは非常に高まっているのではないかと思う。

**(節田座長)**

その辺りも信州登山案内人の活用場面かと思う。そのほか何かあれば。

**(篠崎委員)**

私共は村として、登山のことをお客様から問い合わせを受けるケースは非常に多い。基本的な山岳情報は原則決まっているので、問い合わせをしなくてもいろんな情報から入手している。だけれども今の現地情報というのは、リアルタイムで収集をし、発信をするというのはなかなかできていない。白馬の場合には、山に入っているガイドの皆さんからその時の情報を全て下さいと。それを一元的に集めてオフィシャルの情報として出していく、という実現化を図っている。それはあくまで、人の手を介した限りある情報であるので、完璧にはいかないが、そうして情報提供をしている。お客様はそれを見るケース、問い合わせをするケースあるが、長野県としても広くいろいろな山域の今の情報を一元化するというのは極めて大事なかなと思う。そこから入って地域の山域の情報につながってくるといったところが、情報発信の一番の根幹になるのであろうと。システムをいかに充実していくか、お互いに情報を入手・提供する我々のしくみと、とりまとめをするしくみの両方から構築していけばかなり有力な長野県としてのシステムができるのではないかと考える。

**(節田座長)**

次々と予算に関わる課題が沢山出てくるが、先ほどの遭対協の問題も含めて、選択と集中が必要。可能性としてはいかがか。

**(浅井観光企画課長)**

今年度こういう形で皆様からご意見を頂くことになった。1回目と2回目、10月に2回開催したという理由は、来年度の予算に出来ることから反映しようという意図である。頂戴した意見を全てを実現できるかどうかは私たちのこれからの頑張りだが、すぐに実行できるもの、準備期間をおき時間をかけて準備をしなければならないものとあると思う。すぐできるものについては来年度の予算で確保していきたいと思っているし、準備期間が必要なものについては、今年度検討していきたい。

**(節田座長)**

夏山常駐の延長と、先ほど補導員の通年での配備はそれほど準備が必要なものではないと思うのでぜひお願いしたいと思う。その他5番の規制を除いて、このペーパーの中であれば。

**(宮本委員)**

今お金のことは心配するなということがあった。今までやってきた啓発は、少し時代遅れになりつつある。例えば計画書を提出するということだけではとても及ばない。それで、去年あたりから原（山岳観光推進員）さんを中心にやっておられると思うが、具体的に、一般登山者に届くような指導や情報提供を進めないと、こういう議論をしても減らない。そういう点では、どこへ相談したらいいかということが分からないので、ぜひ来年度は、山岳総合センターの中に県警の方がいつもおられるというような、相談を受けられることをPRして、やってみたらどうかと思う。

2つ目は、同じことを繰り返すが、登山の入り口で徹底的に直接指導をする。場合によっては入り口でレクチャーをするということも含めてやってみて、減るかどうかということ（判断）してみないとだめである。費用的にはそれほど沢山というものではないと思うので、具体的に来年やってみてはどうかと私は思っている。それからもう一つ、自己責任ということと言うと、事故を起こしたら、あるいは登山の危険を無視して入ったら、誰も責任を持ってくれません、あなたが持ちなさいということ言うために、保険に入らなかったらとてもお金がかかるということを強調したり、具体的に費用をとるということを検討すべき。例えばスイスでは規制などではなく、全て自己責任。初めて行った人も、きちんと保険に入る制度が確立されているということで、山の責任は誰も取りはしませんよということ、検討していかないと、いつまでたっても追いかけてこなくなりかねないと思う。ぜひ来年2つぐらいのことをやってみてはどうか。

#### **（節田座長）**

おっしゃるように、具体的な施策を実行していくのが肝心。これはお聞きしていいか分からないが、原山岳観光推進員が横尾で実際に登山者と接触しての活動・やりとりを振り返って感じたことをぜひ委員の皆様にも教えて戴きたい。

#### **（原山岳観光推進員）**

今年の4月から山岳観光推進員として勤務をはじめ、夏山前に遭難対策として何ができるかを考えた際、横尾という場所に人が集まってくると感じた。そこでモデル的に、横尾で集中的に何か行えば、いろんな教訓があるのではないかという気がして活動を始めた。松本市山岳観光課の課長さんにも様々な相談・協力を頂きながら7月、8月で8回、基本的には週末金土日と横尾へ入り、入ってくる方たちと接した。だいたい1日に、多くの方と話をすることができ、先ほどから話のようになるべく恐怖を与えるような統計を表に出したりしてきたが、最も感じたことは、我々が常識と思っているようなことをほとんどの方が承知していないということ。この山域では昨年100件近い遭難事故があり、9人の方が亡くなっていることを示す標識を指すとほとんどの方が驚いた反応を示す。つまり自分たちがそういう神の領域に入っていく、ひょっとしたら命のリスクがあるというところに行くという認識がない人が多い。特に若い人たちはそういう感覚がした。

そういうことを具体的に、リアルにお伝えすることが、若い人たちを含め、たったそれだけの情報を伝えただけだが、ありがとうございましたと丁寧に頭を下げて入っていくという姿が印象的だった。金曜日や土曜日に接触するので、日曜日の夕方ぐらいまでいたのだが、登山者が下りてくると顔なじみになっているので、ありがとうございました、お陰さまで無事行ってこられましたと言って帰ってくるので、理解は得られる。正しい・リアルな情報を伝えることが大事なとつくづく思った。特に山と観光の境目を明確化するというのは、とてもいいアイデアで、そこで啓発ができれば効果的ではないかと感じている。

#### **（鈴木委員）**

先ほどから話が出ている、横尾から先、槍と穂高は非常に良い起点があるのでそれでいいと思うが、長野は広くいろんな山がある中で、なかなか他の山域にパトロール隊を置くわけにいかないと思う。実現性がどうかと思うがコストはそれほどかからないと思うのだが、例えば信州登山案内人の方や、山岳協会・山岳会の方、あるいは日山協のスポーツ指導員の方に、趣旨を説明して腕章を配り、長野の山に行く時はこの腕章をして入ってくれということで、何らか危険な歩き方をしている人などに対しては、紳士的に優しく指導しましょうというようなことは、あくまでボランティアベースではあるが、何もないと声もかけないと思うが、腕章の一つでもあれば、あまりにも落石をしそうな歩き方をしている人に対して注意はすると思う。それほどコストはかからないと思うが、いかがか。

### (高橋委員)

今の鈴木さんの話に関連して、遭対協の補導員という人が相当数委嘱を受けているので、併せてそういった行動をしやすい腕章を（配ってはどうか。）各地区の遭対協とも話をして、補導員を使っただけなら。それと、別の話になるが、啓蒙とか啓発という中で、安全セミナーを開かれているという話があったかと思うが、それは5回とか6回という話だと思うが、例えばそういったセミナーの様子・映像を配るとか、求める人に提供することも考えていいのではないか。先ほど東さんの方からも大型スポーツクラブ等で登山の活動が始まっているという話があったが、指導する人がソースをそろえるのはなかなか難しい。登山の技術や一般の技術書はそれでいいと思うが、やはりいろんなアドバイザー・直接現場を知っている方を含めた厳しい話を含めたセミナーの内容を提供してくれというのを待つのではなく、こちらからこういうものがあるという話をしていってもいいと思う。

それから特に八ヶ岳を見ていて思うが、日帰りで殆どが行ってこられる。そういう方が事故を起こすが、時間等に追われてちょっとしたところで事故を起こすと思うのだが、各地区の話で、観光ポスターのようなものでお客さんと呼ぶが、一番山のポスターは目に付く。その中に、例えば一日のところを二日かけて行きましようとか、三日かけて余裕を持って行動しましようとか、そういうものを入れるようなことを専門家の人に考えてもらおうと、ぱっと見て時間を作ってもらえるのかなとも思う。

### (節田座長)

内野委員は、何かご意見があれば。韓国のこと以外でも。

### (内野委員)

私が住み込みで働いている日本山岳会の施設が、明神側もしくは岳沢の方から下りてくる人にとり一番最初にある小屋であるので、お助け小屋というか、駆け込み寺のような方がいらっしゃることがある。大体明神から来る人は「トイレを貸して下さい」なのでいいが、この9年間で夜遅くなってから岳沢から下ってくる人がいる。シーズン中に2組～3組くらいだが、特に岳沢ヒュッテがなかった頃は穂高岳山荘からずっと歩いてこななければならなくて、途中で足が痛くなり、とか途中で暗くなってしまって道に迷ってしまって、という方が多かった年もある。

ほんの10日位前の週末に、夜中の2時に女の子が1人で山研（日本山岳会上高地山岳研究所の略称）に来て、最初は軒先で寝ていたらしいが、あまりに雨が酷くなって、入ってきて床で寝ているところを宿泊者に発見され、部屋に通した。彼女の話は遭難の典型。1人で夜歩いていることから、ある程度の登山歴はあると思いきや聞いてみたところ、高尾山に登ったことがあると言う。他には、というとうーんという感じで、高尾山が日本国内で一番最初に登った山で次が、槍まで縦走するつもりだったと本人は言っている。

結果的には上高地から岳沢小屋までの間でこんな険しい道は無理と思い、岳沢小屋に泊まったところ小屋の方に止められ、前穂まで行って上高地まで下りようと思ったら前穂までも届かず、上高地のお風呂を目指して、夕方になって岳沢小屋を出、下っていった途中で道を外し、彷徨していたと。彼女に「生きていてよかった」という話をしてしたが、情報はどうやって得たのかと言うと、インターネットだと。インターネットだが、何を見たのか、どんな情報を見たのかは分からない。靴も新しく買った靴を履いていて、気合とやる気だけはあって頑張ろうというのはあるが、全く実力は追いついていない。実力が追いついていないことも本人は来てからやっと分かったようで、どうしてこんなに普通の登山道じゃないのですかというような状態で入ってくる人がいた。

これはかなり極端な例なので、こういう人ばかりとは思わないが、このホームページをまず見なさいというホームページがあればいいなと思った。その中に、最初にここの山に登ったら次はここの山に登るというように、ステップアップできるような形が一目でわかり、そこからもう少しリアルタイムな情報として、山小屋や他の山域にリンクすることができるホームページがあればすごくいいと思った。もう一つ、先ほどの彼女がとても格好

いいまどきの格好をしているので、一見登山歴・実力が分からない。これは可能なのか分からないが、登山届に初心者だと自己申告できる欄を設けたり、初心者マークみたいなものを貼って、私は初心者なので声をかけてくださいというようなものがあると大変分かりやすいと感じた。

#### (東委員)

内野さんのケースは決して特殊なケースではないと思う。これは岐阜県側の事故のことだが、やはり同じように気合い十分で全ての道具をそろえてきたが、とても無理だということで全ての道具を捨てて下山した人がいた。これは実際にあった話である。富山県の方では、剣岳の三の窓雪溪の下のところで道を間違えて、遭難した方は山岳救助隊の方を見てそれこそ「三步」みたいだと言ったそうである。現実とインターネットの中で作り上げた自分の世界、それだけで突き進んでしまう層というのは相当数いると認識して全く間違いではない。

#### (節田座長)

羽根田委員は、ネットの使い方というか、我々のサイドからすれば利用の仕方だと思うが、利用している登山者の側とそれを利用して啓蒙したい側と両方に立ってどう思うか。恐らくネットが一番有効な手段かと思うが。

#### (羽根田委員)

やはりどういった情報を発信するかによると思う。公的機関が発信している情報は、自分から見ると物足りない、もう少し深い情報がほしいなと思うし、逆に個人の情報は、基本的にインターネットで発信しているのは自慢話なので、参考になるものもあるが話半分くらいに聞いた方がいいと。そういうことを考えると、内野さんのおっしゃった通り、これを見ておけば大丈夫というようなインターネットのサイトを救っておくことは大きな手段になるのではないかと思う。

#### (節田座長)

そこで十分相談室のような機能を果たせるのでは。付け足し的で恐縮だが、内野さんは外国人の項目について具体的な施策あるいは方法論として何か。

#### (内野委員)

今長野県内に来ている韓国人登山者という意味では、前も申し上げた通り北アルプスの特定のコースに集中している。その部分についてはツアー会社が主なので、ツアー会社に直接情報を発信することだと思う。コースも一定化しているので、詳細なコース情報を提供することがいいかと思う。

ただ、実はツアーではない層というのも潜在的に多くあり、私のホームページにQ&Aコーナーがあるが、そこへメールで質問してくる人は大抵が個人。その方々が知りたいことは、アクセスから持ち物・山小屋の利用・予約の仕方やからありとあらゆるいろんな細かいこと。ただ、それがクリアにされていれば個人的にも来たい人たちはいるだろうという実感はある。

今年、偶然上高地内を歩いていた時に見かけた韓国人は、60代の夫婦で白馬から上高地まで13日間かけてテント泊で縦走していた。そういうご夫婦がいたし、新穂高からロープウェイを使って西穂高を縦走して槍まで行って下りてきたという13人ぐらいの団体がいたりした。6月くらいに来た若い韓国人カップルは残雪期の穂高に来るのに慎重に準備をしてきた。ツアーというとコースも決まり季節も決まり、だが、そうでない登山をしたい韓国人も実は沢山いるのではないか。その人たちのために、これを見ればいいというホームページの韓国語版があれば大変いいなと思う。私とそのホームページを目指しているが、なかなか(難しい)

また、私がいつも思っているのは正しい地図である。地図はとても個人では立派なものではないが、韓国人はとても欲しがっているので、地図等もダウンロードできるような立派なホームページがあれば。後は山際作戦の、韓国人にここから入るところはそういう危険な地域なのだということを教えるために、ビラが一枚あればいいと思う。横尾のところにある大きい看板に滑落や死亡とか絵の上にあるのは韓国の人達もよく使っていて、ここでは危険だということをツアーのリーダーが登山者に話をしているのを聞いたことがある。目で見てリアルに

分かるものは重要でないかと思う。

**(節田座長)**

実際にこの数年のほとんどの韓国登山者は槍・穂縦走である。それ以外に、先日は中央アルプスの事故があったが、そのように山域が広がって行きそうか。

**(内野委員)**

広がっていくと思う。恐らく槍・穂もスイッチが入る、つまりツアー会社が来はじめて（韓国人登山ツアー数は）うなぎのぼりだったのではないか。それがいつ始まるかは分からないが、どこかで入り始めたら広がっていくと思う。韓国の人達も槍・穂・北アルプスはいいいところだと言ってお客さんも沢山集まるからツアーが沢山来ている。ツアー会社としては、お客さんが10人も20人も連れて行くにはちょっと危険すぎると思っているガイドもいる。そういう人たちが南アルプスの方がいいなと言っているのは聞いたことがあるし、八ヶ岳のアルペンのなムードも感じられつつ難易度の低い山を商業ベースで考え始めたりすると、そういうところからまた登山者が増えていくのではないかと思う。

**(節田座長)**

ある程度そういったブームというか、流れはツアー会社が握っているのか。

**(内野委員)**

ツアー会社が握っている。と言っても、いい。

**(節田座長)**

そこに対する働きかけが大事ということか。

**(内野委員)**

ツアー会社・旅行会社はすごく効果的だとは思う。

**(宮本委員)**

中央アルプスの事故は大変衝撃的だった。一般の方も話題にするぐらい。また、これからも増えそうだとこのこと言うと、座長さんを中心になられたトムラウシの事故による、そのあとのガイドラインのようなことを守らせる方法を積極的にとる必要があるのではないかと思う。それについてどうお考えか。日本のツアーのガイドの方はそれを守るのは当たり前。この前の韓国のガイドは、きちんとしていないように見える。

**(節田座長)**

この間の事故は個人のパーティ。いわゆる山岳会で、日本のガイドもついていない。槍・穂高へ行っているのはおそらくツアー会社だと思う。ツアー登山運用マニュアルという JATA と ANTA のツアー登山部会で決めたものがあるが、もちろん外国の旅行社には及ばない。そういうものがあるということを、韓国の人に伝えるしかない。少なくともツアー登山の方に対する PR 活動を進めたい。

問題の対象は多岐にわたるため、これだけでも時間が過ぎてしまうのだが、先ほどから議論のある5番の規制について、一番いろんな意見がおりかと思うので、最後こちらについてお聞きしたいと思う。

では説明をお願いしたい。

**(浅井観光企画課長)**

資料【3-1】について説明。

**(宮本委員)**

実は今日のはじめて規制という言葉が長野県では（話題として）出たわけではない。過去に2回ある。1回目は昭和41、2年ころ遭難が多く、このような問題が出た。この時長野県は、規制ではなく、山岳総合センターというようなものを作りながら、基本的解決をすとし、（これが）山岳センターができた理由の1つである。もう1回は、長野国体の次の年の（52年ごろ）これもまた冬山の遭難が多く、もちろん40年代も50年代も、その当

時の遭難は山岳会の遭難だったことがあり、この時は県知事あてに日本山岳連盟から、要望書を出し、そこでやはりそういう努力を山岳会なり協会なりがするという事になった。ここ（検討会）で出てくるということについては、私はなぜ出てくるのか、というのが率直な気持ちとしてある。それから、協会の人間にも、こういう問題が出されたので聞いてみたが、なぜそういうことを今出すのか、というのが率直なところで。特に一般登山者というか、未組織登山者の部分が多く、規制で防ぐというようなことが本当にいいのだろうか。

それから、長野県の知事が出している方針の、山岳リゾート立県を目指すことと反対方向へ行くのではないかという気持ちも正直なところある。松本や大町の方では、自治体でも山岳観光客を呼びたいわけで、そういうことへの障害になる恐れもあるのではないか。これは枝葉の問題だが、本当に長野県は事故を起こしてはいけないので、規制ということではなくて、皆さん来てもらうが、厳しい掟というのは山にありますよということを教育、あるいは徹底しながら、楽しみながら事故を減らすという努力をとことんやるべきだという気がする。ちょっと強く言い過ぎだが、率直に言うところのことである。

#### （節田座長）

座長がこんなことを言うべきか（わからないが）、一登山者としてはその通りだと思う。そういう自由な発想のもとに、文化活動なので、規制で防げるものではないと思うが、なんらかの具体的な対策が必要だということは共通していると思う。あるいは季節・場所によって、期間やエリアを限定して、ある期間入山規制をするとかそういうことは山の状況によってはあるのかなと思う。そのようなところで、山口さん、今年の春、実際どういう状況でどういう手続きというか手順で規制をされたのか。その辺のお話しを。

#### （山口委員）

今年の春というか4月の26日の日なのだが、天候が悪化し、山中吹雪になり、涸沢で約、27日の開山祭で、私も出席したのだが、そのときも吹雪だった。吹雪の中で開山祭をやったのだが、山の方へ連絡をとったら腰ぐらいまで降った。これはやばいと、というのは前の年に涸沢で、出たこともない雪崩を経験し、2年ぐらい前だが、4月の27日で同じく開山祭の日だが、やはり前の日からずっと雪が降り、40年間涸沢で仕事をしていて、絶対売店には、うちの庭には雪崩が来ないという確信を持ってやっていたのが、一瞬のうちに、一発の雪崩で吹き飛ばしまして、かくも人間はこんなに儂いものかという、山の神には敵わないなという経験をした。その中に雪崩で巻き込まれて、うち（涸沢ヒュッテ）の支配人が片足複雑骨折という大けががあり、これはもう、山の世界はいくら経験を積んでも未知の世界、あまりにも怖い世界があるなと感じた。今年の春先にやはり同じぐらいの積雪と、条件が非常に似通ったため、私の判断でそのまま上（涸沢ヒュッテ）の方へ連絡して、とにかく今日はもう小屋も何もとにかく外へ出るなと（伝えた）。外へ行くのはトイレへ行くときだけだぞと話をし、テントにいる人も全部小屋の中へ避難させると。今日は開山祭で、（涸沢へ）上がる人もいるが、これは上高地で全員を今日はやめてくれというアナウンスというか、上高地には登山相談所があるので、そのところで、とにかく入らないようにと。ちょうど県警の春山常駐の入山日だったので、県警を2名横尾まで飛ばして、涸沢から奥については雪崩の危険があるので、今日は解除は多分無理だと思うので、雪が落ち着くまではやめてくれとストップをかけた。立ち入り禁止にしたということになるかと思うのだが、そういうことがあった。それは本当に、誰がどういう手続きを踏んで決めたのかと言われると、私が勝手に、私の経験上決めたというしかない。山では臨機応変にそういう危険を察知しながら、できる限りの予防というか、遭難事故を減らしたいという、その気持ちだけである。

27日の開山祭の日実際にストップしたときには、上高地インフォメーションセンターにうち（涸沢ヒュッテ）に泊まるいろんな方がおり、なぜ入山禁止にしたのか、とかなり食って掛かれた。約100人の予約が入っていたが、その人たちが全員私の方に来て、なぜだと。半端ではない雪が降って、そこは2年ぐらい前に雪崩がきてこういう事故があつて、死んでもいいなら入ってもいいが、本当に今日は勘弁してくれと。入っても今日は

横尾止まりまでにしてくださいと。どうしても山へ行きたい人は、蝶ヶ岳の方へルート変更しろ、ということをして今年の春やった。私としてもせっかく登ってきた登山者に来てほしかったので、痛し痒しというか。やはりそれよりも山小屋を運営して山を守っている者としては、とてもどうぞとはいえる状況ではなかったため、山へ入るのを控えてもらったという経緯。これは27日の開山祭の次の日の28日の昼過ぎに雪が落ち着くころまで、とにかく人を入れるのをやめようという判断をしたことがあった。参考までに。

とにかく開山祭の日なので、入山している人は動いているので、とにかく現場で対応しようということが第一、そのあとで登山相談所、県警本部の方にも連絡を取って、横尾から上は、槍沢方面は何人か行ったらしいが、槍（槍ヶ岳）の方の方はなんでうちの方を禁止にしたのだという声も後から私は聞いている。涸沢方面だけはとにかくやってくれということで私はやってきたが、一応そういう危険な状況だった。何事もなくよかったと思っている。残念ながら白馬の方では1名か2名くらいその日入った人が事故を起こしたという話を。

#### **（節田座長）**

白馬でもありえる話。大雪渓と三国境の遭難を併せて考えると。

#### **（松本委員）**

今年の夏は大雨でクレバスが4～5本でき、7月22日に杓子から大きな土石流があり、急きょ入山を禁止して、1日でルート工作はしたが、やはり生死にかかわるため規制した。また、白馬大雪渓は午後2時以降は入山禁止という形をとっており、時間的な規制は行っている。また、猿倉線が大雨で雨量規制の場合は当然入山できない。規制という言葉自体が頭にぐさっとかかるものであるので、自粛だとか、先ほど宮本委員がおっしゃったように、規制という形ではなく、警告という見出しの方がいいのではないかな。

#### **（節田座長）**

今の穂高や白馬の例が代表的な、かなり急激な気象変化による規制と言うか、入山自粛というような措置だと思うが、ここで考えているのはより広範囲での規制と言うか、遭難者を減らすために規制が有効かどうかという論議。その辺どうか。

#### **（鈴木委員）**

先程の涸沢の時、当社のツアーも涸沢へ向かっていて、現場での反応はわからないが、帰ってこられたお客様からは一切クレーム等はなかった。そういう現場を見て、説明を聞いて納得頂いたのだと思う。そういう当日の悪天候の場合の規制は、現地の判断でやっていただいた方がいい。我々も、長野県の山の状況に関して、行くか戻るか、東京にいて判断に迷うときがあるので、それはどんどんお願いしたいという語弊があるが、やって頂いていいと思う。

特定の地域・期間が特に事故が多い過去の谷川岳、剣岳のような例が、長野の場合に当てはまるのかというと、限定した地域・期間というわけではないので、やはり入山の規制というよりは、部分的な規制で、努力規定のような形で進めるのが長野の場合はあっている気がする。

#### **（節田座長）**

強い注意喚起というか、そういう措置だと思うのだが。実際富山は県で条例の対象地域にある積雪期池ノ谷に入った登山者が雪崩でやられたのがきっかけだが、群馬県もやはり、規制されているのは基本的には谷筋の雪崩に対しての規制で、広く地域を規制するような条例ではないと思う。特に長野県の場合は非常に範囲が広いので、全体に網をかけるような規制は難しい。他には何か。

#### **（羽根田委員）**

私も概ね皆さんの意見と一緒に、一つ言えるのは登山は自己責任というのは大前提だけれども、最近の登山者はやはり自分で判断できない、リスクを判断できない人がかなりいるということ。本来なら自分で判断して動

くか動かないかというのを決めなくてはならないと思うが、それができない登山者が多い。ある程度のリスク情報を提供するのには必要だと思う。先程山口さんがおっしゃった、行くのはやめてくれというような、スポットスポット的な規制はいいと思うのだが、長期的なものに関しては、節田さんもおっしゃったように、エリアが広い、長野の場合、その日その日のコンディションによって違ってくる。例えば今日は雪崩の危険はあったけど明日は大丈夫というように。バックカントリーの問題とも絡んでくると思うが、長期的な規制というのは自分もちょっとやめてほしいなという気がしている。それよりはリスク情報を提供する、広く入山者に提供するほうがいい。

山岳ガイドの中には、30センチの積雪があつたら、次の日のコンディションがどんなによくても山には行かないというような人もいた。そういった基準を定めるのも必要ではないかと思う。

**(節田座長)**

残念ながら予定の時間を超過しているが、最後にリスク情報と観光振興とは相反するが、加藤さんと篠崎さん、最後に何か。

**(篠崎委員)**

規制の関係は、白馬でも過去2回議論して、何を論点としたかということ、誰が規制をするのかということである。最終的には行政が責任をもって判断するということとした。ただ行政が山の情報をわからずに判断できないので、遭対協の方々、県警、山小屋の関係者、あらゆる情報を集めて一元的に村が判断をして、そこから村としてオフィシャルに規制することをルール化した。このルールはすべてのエリアにあてはまるものではないと思う。南部は遭対協の山口隊長さんがやられるケースもあるし、白馬は行政が責任を持って関係部署に周知をしていくという風に。したがって規制の問題というのはそれぞれの時と状態、山域によって全く異なるので、一元的にルール化するというのは非常に難しいということから、まずはいろいろなガイドラインの中で、情報をしっかり出していくような形がいいと思う。

**(加藤委員)**

基本的には篠崎委員と同じ。もう一点、入山届を出すことが、不可欠あるいは遭難防止に有効だということになれば、登山届を出すための啓発というか、より届出率が高くなるような方策というのは別の形で考えられるのではないかと。それにはまた別の議論が必要ではないかなと思う。

**(節田座長)**

先程の通り、長野県は非常に範囲が広く、山の性格もだいぶ個体差がある。全部一斉に網をかけるというのはなかなか難しいのかなと思う。この問題もいろいろ議論をすると尽きないと思う。残念ながら10分ぐらいはオーバーしてもよいと言われたが、その10分を経過している。今日の皆さんのご意見をまとめて、今年度中には提言という形で知事に出したいと思う。(他に)なければ次回の予定を説明願いたい。

(以下、事務局から日程説明のち閉会)